

第六講 羅馬訪問の計畫 第一章八―十五節の研究 (二月廿日)

第一章一節―七節の「自己紹介」は寔に重要な箇處であつた、それを通り來りし我等は、恰も疊々たる寶石の間を踏みわけつゝ來たやうなものである、然るに我等は又第八節より全く別の世界に導き入れられるのである、前より用ひ來つた比喻によれば、壯麗雄偉なる表門を通過し終つた我等は愈よ本館に入ることと豫期せしに、然らなくてはならず、一つの廊下のあるに會したのである、この廊下は寶玉を鑲めし如き表門に比すれば寧ろ簡素撲渾と稱すべきものであるため、心なき者は往々にして平凡として之を看過する有様である、併しながら果して是れ平凡であらうか、精密なる注意が先づ之に向つて注がれねばならぬ。

- (8) 先づ汝等の信仰を世こそりて傳揚めたるが故にイエスキリストによりて汝等衆人につき我神に感謝す、
(9) 我其子の福音に於て心をもて事ふる所の神は我が斷えず汝等を懷ふ其證なり、
(10) われ祈禱ごとに終には神の旨意に適ひて平坦なる途を得、速かに汝等に到らんことを求む、
(11) われ汝等を見んことを深く願ふは汝等を堅固うせん爲に靈の賜を與へんと欲へばなり、
(12) 即ち我れ汝等の中に在らば互の信仰によりて相共に安慰を得べし、
(13) 兄弟よ我屢々志を立て汝等に到り他の邦人の中に在る如く汝等の中より果を得んとせしかども今に至りて尚阻げらる、こを汝等が知らざるを欲まず、
(14) 我はギリシア人及び異邦人また智人および愚人にも負へる所あり、
(15) 此故に我れ力を盡して福音を汝等ロマにある人々にも傳へんことを願ふ。
- 一讀して受けた印象に於ては、此箇處は單なる挨拶の語にて他に奇なきが如く思はれる、又文字上に於ても次ぎ

の十六、十七節が容易に了解し難き所なるに反して、十五節までは平易明瞭にして其意味は容易く掴み得るのである、然らば我等は此箇處を平凡無味の所と看做して、特別の注意を拂ふ要はないであらうか。

これを山中の水に譬へる、樹の根を潜り草の葉を渡りて谿に集り、幾つもの谿川が凹地に注ぎ、下より湧き出ずる水と合して一の湖を造る、その湖の深さ、静けさ、清らかさは、天に向ひて開きたる澄める瞳に譬へつべきものである、その貴さは誰しも認る所である、湖の水は靜かに靜かに下方に移動して聴て湖口より川となりて流れ出づる、其川は湖に比すれば狭くして浅い。たゞ岩に激しつゝ水が低きに向つて流れゆくのみである、されば浅き觀察者は此川を閑却して唯かの湖の奥床しさのみを讀へる、しかし乍ら實は此川に又少からぬ趣きと味ひとがあつて、かの湖に於て見出せし所とは異なる別箇の貴さが在るのである、其水の流れ、其岩のたゞずまひ、其兩岸の姿、その浅流、その碧潭……その凡ての物には無い所の風趣があるのである。羅馬書第一章一節―七節を貴みて八節―十五節を平凡として棄て去る人は、山中の流れを棄てゝその湖のみを愛する浅き人である。因みに言ふ、一度川となりて湖より流れ出でし水が聴て突如として一大瀑布の壯觀を作り、又川となり、又湖となり、又瀑布となり、數多度姿を變へつゝ遂に洋々浩浩たる大河となりて海に注ぐが如く、羅馬書全體は幾度も幾度も姿を變へて讀者の前に現はれ、そして其何れの姿にもそれぞれ特殊の趣きありて遂に終尾に至るのである、之を讀むものは其一語一語に、其一句一句に、其一節一節に、其一章二章に、其凡ての箇處に細心の注意を拂はねばならない、一として不用又は無價値のものはないのである。

まづ注意すべきは一章八節―十五節がパウロの人格發露であると云ふ事である、一節―八節は自己紹介ではあ

つたが其内容はパウロの基督教觀の綱目のやうなものであつた、即ちパウロの神學、パウロの人生觀の縮圖であつた、そして自己の哲學、自己の所信を發表するに甚だ急であつて決して自己自身を現はさじとする人が世には多い、自己の情緒、感激、意圖、心持等をさながらに發表して自己の有りのまゝの姿を人の前に露呈する事を^{つと}めて避けるは、貴からぬ人のつねである、然るにパウロは自己の信念と併せて自己其儘の姿を赤裸々に人の前に現はして少しも悔いない人である、茲に彼の偉大さが存するのである。また美はしさが存するのである。八―十五節は即ち此純なる自己發表である。

我等が此處を讀みて彼の性情に觸れ、彼の心の動きを見得るとき、一種微妙なる心の絲が彼と我等を繋事を實感する、のみならず之に依て偉大なる基督者の人格を知り得る事は我等にとり種々の意味に於て少からぬ幸福と利益である、世界を動かせし大使徒の人格如何、最も大なる愛をキリストに捧げたる偉人の性情如何、我をも燬^やき盡さんとする如き熾烈敏感なる魂の所有者の偽りなき姿如何、之等を知るは信仰上の實學として其値少からぬのである、もとより此箇處を以てパウロの性情全部を知る事は出来ない、他に哥林多前後書の如き此意味に於て極めて有力なる材料を併せ見るべきは當然の事であるが、少くとも此箇所の眞價の茲にあることは先づ明知して置かねばならぬ。

八節前半を原文の順序のまゝ記せば

先づ第一に 感謝す 我神に イエスキリストを通して 汝等凡てにつきて

となる、「第一に」と記すも八節以後に第二も第三も出て來ない、恰も頭あつて尾なきが如くである、文法的にま

た文章學的に之を推賞することは出来ない、しかし此種の文法無視はパウロには有りがちのことである、彼の書翰中より此種の缺陷を幾つも發見することが出来る、主語あつて説明語たる動詞なき場合の如きも一再に止まらぬのである、勿論此種の不注意は殊更に真似すべき事ではない、しかし文法的不注意は平然として爲せしパウロが、大切な事に於ては實に遺憾なき注意を用ひたる一事は我等の充分に學ぶべきことである。所詮文法は形體のことにして孰れにても可なるもの、生ける精神は生命なれば形體の如何に係らず沸々として文字の外に溢れ出づるのである、パウロが注意を用ふべき事と用ふるを要せぬ事との差別を立てたるは大小緩急を各々適當に辨別し且虞置したる實務的手腕の一片影であると思ふ。

「先づ第一に感謝す」である、挨拶の最初が感謝である、人に對する感謝ではない、神に對する感謝である、パウロが歡喜に溢れた人であつて、歡びを唯己れの歡びとせず之を神への感謝と云ふ心持に於て味はつた事は注意すべきである、且又神を懷おもふ事が常に心の先頭を占めて居つた故、かゝる挨拶の最初に「第一に神に感謝す」と云ふ語が自然と出たのである、實に美はしき心、慕ふべき魂の清きではないか、先づ感謝するのである、先づ神に對して感謝するのである、しかも自己の事業の成功の故ではない、己の名譽が揚がつたからではない、實に人の事について、而も人々の信仰について、福音それ自身のことについての感謝である、純にして貴き感謝、且常に神と共に歩める人の心の反映としての感謝である。

次ぎには「イエスキリストを通して」の一句あるに注意すべきである、これパウロ特愛の句であつて、彼の信仰の性質を示すものである、即ち神と己れの間の仲介者としてキリストを見るのである、これ前回に説明せし點

である故茲に反復を要さないのである、其次には「汝等凡てにつきて」の句がある、パウロの感謝は己れについての感謝ではなく、在ロマの凡ての信徒——信徒全體——についての感謝である事が分る。

第一にイエスキリストを通して我神に、汝等凡てにつきて感謝すると云ふ、何を感謝するのか、何のための感謝か、之を示すものは此節の後半（原文に於ては）である、即ち邦語聖書に「汝等の信仰を世こぞりて傳揚たるが故に」とあるものである、之を正確に云へば「汝等の信仰が全世界に傳揚められたる事を」である、パウロは此事を神に感謝したのである、全世界にロマ信徒の信仰が言傳へられたと云ふは誇大に過ぐと難ずる人があるかも知れぬ、勿論此種の用語に於て人は數學的正確を期することは出来ない、全世界と云ふも當時世界に生きて居た凡ゆる人間を含むと見ることは出来ない、しかし「世界」と「地球上」とは決して同一の範圍を指す語ではない、世界といふ語の指す範圍は常に時代に由て異なる、當時の世界は即ち羅馬世界である、羅馬帝國の政令と文化との行き亘つてゐた世界である、未だ獨逸の大森林が中歐蠻族の根據地であつた時、未だ露西亞の大平原が野人と野獸との住所であつた時、未だ英島國が北人爭奪の舞臺であつた時、勿論未だ北米南米兩大大陸は發見せられずして東洋文明は別世界のものであつた時、この時に於ての全世界は地中海を中に挿む所の謂ゆる羅馬世界であつたのである。

かくの如きが當時の全世界であつた、そしてロマ府は其中心であつた、山巔の水が流れて麓を濡^{うる}はす如く、池の中央に投ぜられし石が波を岸まで漂はす如く、首都の事象は噂の波に乗りて自づと羅馬世界全體に聞えるのである、「傳揚められる」の原語(*katanyntes*)は、言傳へらるゝと稱揚せらるゝとの兩義を有する語である、

即ちロマ信徒の信仰が單に言傳へられたるのみならず稱揚せられたのである、勿論不信者は之を稱揚しなかつたであらう、併し信者は皆これを稱揚したのである、首都の信者の信仰が羅馬世界の基督教徒全部に聞えて其稱揚を得その信仰を勵ましたことは勿論、又不信者の側に於ても評判は可成り高くなつたことと思ふ、當時基督教は未だ今日の如く文明國の宗教としては認められなかつたとは云へ、ともかくも猶太人の間より出でし一新宗教として漸く世人の注意を惹くに至つた時であつた、此時首都ロマに若干の信徒が現はれて而かもその信仰の堅固にして操守の嚴正であつた事は、恰も燃ゆる^{ほのほ}焰に新たなる薪を投ぜし如く、羅馬世界の不信者をして、よし好感を以てせずとも少くとも驚異の眼を以て此新宗教に對するに至らしめたことと思ふ。

中央の信徒の信仰的堅立は全世界の信徒を獎勵する道となり、又全世界の不信者をして新宗教に注意を向けしむる所以となつた、此二事を含めてパウロは感謝したのであると思ふ、前者は勿論感謝の充分なる動機たり得るが後者は果して如何との疑問も出でやう、しかしパウロがたゞの評判を喜ぶ人でなかつた事は言はずして明かである、彼は斯くして福音が次第に全世界に浸透すべきを思ふて躍り立つ胸の歡びを感じたに相違あるまい、神の福音を全世界に弘流せしむる大志望を其燃ゆる魂に漲らせ居たる大使徒パウロの心を思ふ時、われらは第八節の感謝の動機を知るに於て難くないと思ふ、何れにせよ中央の信徒の重き責任を考へ、其位置に對して適當なる價値の認識と敬意とを以てしたるパウロの細心は注意すべき事である。

九節に於てはパウロは彼が斷えずロマの信徒を懷^{おも}ふ其證者として神を指し示すのである、「……神は我が斷えず汝等を懷^{おも}ふ其證^{あかし}なり」と云ふ、原文によれば「我證人は神なり」である、パウロがロマの信徒を斷えず懷^{おも}ふて居

たこと、そして何とかして彼等を訪はんものをとの切なる望を抱いて居た事、其事は彼の心の中の事實であつて彼の最も能く知つて居ることである、多分彼の二三の友は彼の此心を彼より聞いて知つて居たであらう、しかし誰よりも最も能く此事を知つて居るものは神である、人は之を疑ふかも知れぬ、しかし神はその證者である、そして世に神にまさる證者があらうか、人の中に一人の證者なくも宜しい、我證人は神なりと眞實を以て言ひ得るだけの自信あれば足りるのである、寔にパウロ式の雄勁な語であると思ふ。

この神は如何なる神ぞ、彼は言ふ「われ其子の福音に於て心を以て事ふる所の神」と、「心を以て」は原文「我靈に於て」とある（英語 in my spirit）わが魂に於てである、パウロは己が心靈に於て神に事へるのである、そして「其子（キリストを指す）の福音に於て」神に事へるのである、パウロが神に事ふるに二つの特質がある、第一はその魂に於て、第二は神の子の福音でふ或る限られた範圍に於て事へるのである。

實に此二つは我等の神に事ふるに於て缺くべからざるものである、我等は己が心靈に於て神に事へねばならぬと共に、又キリストの福音に於て事へねばならぬのである、そして此二つの制限を超えざる限りに於て我等の神に事ふる事は自由である、然るに世には此事を知らざる基督者が多い、「神は靈なれば拜する者も亦靈と眞をもて之を拜すべきなり」とのイエスの教訓を忘れしが如くに、空虚なる形式を山と積み重ねてそれに於て神に事ふるを常とする者が多い、複雑なる儀式に依り煩瑣なる手續を経て初めて拜神の道を全うすと誤想せる宗派とそれに屬する信徒多きは歎すべきである、かくの如きは實に異教的形式と稱すべき者である、基督者は唯その心靈に於て、又神の子キリストの福音に於て自由自在に神に向つて活ける奉仕を爲すべきものである、プロテスタント教

の生起は實に斯くの如き純なる拜神の要求に根ざすものである、然るに今や末流濁りて不純なる拜神に心身を疲
らする者多きは歎すべき事である、我等努めて原始の純を追はんと志せるもの、パウロの此語に於て彼が我等の
味方なるを知りて喜びに堪へぬのである。

次ぎは十節である、パウロは祈る毎にロマ行の願の充たされんことを求めて居ると云ふのである、邦譯聖書に
於ては十節は九節と分離して譯してあるが、實は九節と十節を一として凡そ左の如く譯さなくては原意は通じな
いのである。

そは我如何にかして遂には聖意に由りて安らかなる道を得て汝等に到らんものと、我祈祷ごとに願ひて、
斷えず汝等を懷ふ事につきては、其子の福音に於て我靈をもて事ふる神が我證人たるなり。

右の中圈點を施せしは原文に於ての十節、他は九節の分である、右は假の譯であるが併し之に依て原文の意は知
り得ると思ふ、即ち神は唯パウロがロマ信徒を懷ふ事の證人たるのではなく、そのロマ行の希望を強く抱いて居
る事、祈祷の度毎に此希望の實現を神に求めた事の證人であると云ふのである（邦語改正譯を参照の事）。

「平坦なる道を得」については種々の解釋があるが、大體に於て「行くべき道の開かれて」と云ふ程の意味で
ある。上掲の譯に於て「如何にかして遂に」と譯し、邦譯聖書に於て「終には……速かに」と譯せし原語は *ταχὺν ὁδὸν εὐρεῖν* (アイ ポース エーデ ポテ) である、これは他の國語に譯し難き句であるが「もし出来るな
らば 速かに しかし時は不明」と云ふ意である、洵に奇妙な言ひ表はしと云ふべきである。

ハイヤーは此句を if perhaps at length on some occasion (もし多分 遂には 或時に) と譯し、ゴウデーは *if*

by any means now at length)もし何とかして 今 遂に)と譯し、ビートとサンデーとは略ぼゴウデーと一致してゐる、第二語のエーデーは現在又は近き未來を意味する語で「今」とか「速かに」とか譯すべき語であり、第三語のポテは some time or other(いつかは一度)と云ふやうな時の不定を示す語である。

我等は此奇妙な言ひ表はしを用ひたパウロの細心を賞するものである、彼のロマ行きはアイ ポース(もし出来るならば)である、彼は行かんと志し、祈禱ごとに神に祈り、神は多分此祈を聴くであらうと思ふ、しかし彼れ若し許し給はずば、行くことは出来ぬ、故にもし出来るならばである、次ぎはエーデー(今、速かに)である、今にも速かに、遅くも近き未來に行き得るであらうと思ふ、しかし神ならぬ身の斷言は出来ない、神許し給はずば速かに行くことは出来ない、依てポテ(いつかは一度、時は不明)である。甚だしく曖昧のやうに見えるが實は然うでない、眞の信者は斯く云ふ外ないのである、誰か明日の事を知り得ん、誰か聖意を悉く知り得ん、事は如何に進み行くか如何に變りゆくか到底人には解らない、未來の我行動について斷定的言語を用ひざるものが實は強き信頼に住む信者である、我等は此短き一句にパウロの信仰の性質を知り得る事を喜び、且これを自己の鑑とすべきである。

十一節に於てパウロはロマ行き切望する理由を述べた、「われ汝等を見んことを深く願ふは汝等を堅固せんために靈の賜を與へんと欲すればなり」とある、靈の賜を與へて彼等の信仰の發達を促し其堅立を計らんことが彼のロマ行切望の動機であつたのである、「深く願ふ」の原語 *enthymene*(エピポセオー)は切に願ふを意味す、此場合彼等を見ると願ふ情緒の頗る切々たるを言ひ表はすのである、げに情の人パウロは如何に強く彼等を懷ふ

た事であらう、羅馬の信徒の信仰が如何に純良堅固であつても、大使徒パウロより見て尚ほ發達の餘地あるものであつたことは云ふまでもない、彼等は文明の大都に幾多有力なる不信者に圍まれつゝ、強烈なる誘惑の風に襲はれつゝ、其信仰の孤城を守つてゐる。しかも彼等を指導すべき有力なる師はない、そして責任は無限大である。

我には彼等に與ふべき靈の賜がある、彼等を訪ふて之を分與する時、彼等の信仰の堅固となり靈的生命の豐強となるは當然である、彼は小亞細亞の丘陵より又ギリシヤの海邊より西の方夕陽の春く邊を遙かに望見して、彼等に到らんとの切望に心燬かれて幾度か熱き祈りを父に献げた事であらう、美はしきかな情の人パウロよ！

この十一節と比して十二節は特に注意すべき節である、之を原文に忠實に譯せば「即ち汝等の中にありて汝等と我との互の信仰によりて、相共に慰められんため也」となる、「即ち」の原語は *homo de eorum* (トウ ト デ エステイン) である、換言すればと云ふ日本語に略ぼ近いのであるが、前の言が不適當或は不充分なる時、更に適切に又は充分に言ふと云ふ場合の發語である、此場合の如き「十一節の言が稍々不適當なる故更に適當の言ひ方をすれば」と云ふ意になるのである。

ゴウデーは此句を「又は更に適切に云へば」(*or to speak more properly*)と譯し、マイヤーは「かく云ふも左の如く意味するに過ぎず」の意であるとなしてゐる、日本文に於て一の語句を記した後更に適切なる語句を記す時「否」の一語を挿むのが多分此場合に該當してゐると思はれる、即ち必しも前言を打消すのでなくて之をより、能く言ひ直さうとするのである。

パウロは何故にかゝる言ひ直しをやつたのであらうか、けだし十一節に於ては彼は彼等に對して師たる態度を取

つて居た、しかし彼は此時彼と彼等の關係に不圖想到して、彼等が彼の純粹の弟子ではなくして寧ろ大部分未見の人であることを思ひて茲に友人たるの態度を取るの適當なるを思つたのである、茲に於て斯かる發語を用ひて、我れ汝等に到らんと切望するは實に相互の信仰によりて相共に慰められ勵まされん爲であると言ひ直したのである、茲にパウロの謙遜と慎慮とを見る、偉大なる彼にして——彼等の師たる資格の有り過ぎるほど有る處の彼として——此事あるは寔に奥ゆかしき限である、その美はしき禮讓と纖細なる心情とは彼が人格の香氣をして彌が上にも芳醇ならしむるものである、自己を偉とせず自己を高きに置かざるが偉人の特色である。

情緒の濃かなる十一節と謙遜に美はしき十二節とを併せ見て、パウロの貴さは今更の如く感ぜられる、之を自己を高しとして異邦信徒の兄弟たり得ぬ今日の歐米宣教師輩に比して如何に大なる相違ぞや、師たるを知つて友たるを知らぬ所に眞の傳道の行はるゝ筈がない、パウロの偉大を以てして尚ほ喜んで此態度に出でた事は、今日に於て大に注意すべき事である。

十三節はロマ府傳道の志望は今日まで盛なりしも事情が之を許さざりし事、今も尚ほ或事のために妨さげられつゝある事を示す、思はざるに非ず許されざりしなりと云ふのである、企畫が爲されざりしに非ず阻止せられたるなりと云ふのである。

十四節は十三節の理由提示とも云ふべきもの、大圖の中に小圖を包みし如きパウロ式論法である、「我はギリシヤ人及び異邦人、また賢き人および愚なる人にも負へる所あり」と云ふ、「異邦人」は野蠻人の意である、ギリシヤ人は文明人である、パウロは文明人にも野蠻人にも、學者にも無學者にも福音宣傳をなすべき責務ありと云ふ

のである、之を果さぬ中は債務を負ふてゐる、これを果して初めて負債を償却したのである、この大責任を負はせられたれば自分は當然凡ての人に傳道すべき義務あるものであると云ふのである、寔に氣宇の宏大、責任感の熾烈、たぐひなき壯大なる語である。

文明人にも野蠻人にも智者にも愚者にも福音宣傳の義務を負ふと云ふ語の裡には、福音が文明人にも野蠻人にも智者にも愚者にも凡ての人に適する教なる事が暗示されてゐる、洵に然うである、福音は世の萬人に適する、國籍の差別、文化の相違、階級の高下、知識の有無、賢愚の差、老若男女の別は福音の前には皆無である福音は萬人の信受に適する、故にこそ神の福音である、凡ての人を救はんと神の力である。パウロは此大なる責任感を述べたる後十五節に於て「この故に我れ力を盡して福音を汝等ロマにある人々にも傳へんことを願ふ」と記して此著るしき挨拶の部を閉ぢたのである。

この挨拶を全體として見る、其中にパウロの感謝あり、心の願あり、祈りの題目あり、切なる情の發表あり、美はしき謙遜と禮讓とあり、高大なる責任感あり、文字は平坦なれど其内容は百姿千態の趣あり、殊に彼の情性の偽らざる發表として其値の大なるを思はざるを得ない。

パウロは羅馬の信徒に對して右の如く謙遜であつた、かくの如きは彼を輕蔑的のとして彼等の前に提出するが如きものではないか、彼等の中には斯かる言に接してパウロを賤しむるに至つたものが或はあつたかも知れない、パウロが自己に輕蔑を招く危険をまで冒して強て謙遜な態度を取つたのは愚の極ではないか、然り愚の極であるかも知れない、しかし彼が斯く自分以下の者に對して謙遜であつたのは、彼の魂の清さとキリスト的精神の豊け

さを示すものである、獨の文豪ゲーテは言ふた

最も普通の宗教は自己以上の者を崇むる宗教である、これ多數者の宗教である、これより高き宗教は自己と同等のものを崇むる宗教にして、これ即ち哲學者の宗教である（所謂人類的思念と稱して人が人を自己と同等のものとして崇むる人生觀を指す）、されど最上の宗教は自己以下の者を崇むる宗教である、これ即ち基督の教えである。

と。ゲーテを稱して眞の意味の基督者とは云ひ得まいが、彼の高秀なる天才は彼をして此深き評語を發せしめたのである、己より低き兄弟に對して謙遜と禮讓を守り、且切なる愛慕の情を披瀝したる使徒パウロの態度が、如何にキリストの心に似たるものなるかは説明を俟たずして明瞭である。あきらか

第一章一節から七節の「自己紹介」は、まことに重要な箇所であった。そこを読み進んできた私たちは、まるで数多くの宝石の間を踏み分けてきたかのようである。しかし、私たちは第八節から、全く別の世界へと導き入れられる。

これまで用いてきた比喻で言えば、壮麗で雄大な表門を通過し終えた私たちは、いよいよ本館に入ると予想したところ、そうではなく、ここに一つの廊下に突き当たったのである。この廊下は、宝玉をちりばめたような表門に比べると、むしろ簡素で素朴と呼ぶべきものであるため、気の無い者は往々にして平凡なものとして見過ごす傾向がある。しかし、果してこれは平凡であろうか。まずここに精密な注意が注がなければならない。

まず初めに、私はあなたがたすべてについて、イエス・キリストを通して私の神に感謝します。全世界でああなたがたの信仰が語り伝えられているからです。

(8)まず初めに、私はあなたがたすべてについて、イエス・キリストを通して私の神に感謝します。全世界でああなたがたの信仰が語り伝えられているからです。(9)私が御子の福音を伝えつつ心から仕えている神が証ししてくださるのですが、私は絶えずあなたがたのことを思い、(10)祈るときにはいつも、神のみこころによって、今度こそついに道が開かれ、何とかしてあなたがたのところにに行くようにと願っています。(11)私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでも分け与えて、あなたがたを強くした

いからです。(12)というより、あなたがたの間にあって、あなたがたと私の互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。(13)兄弟たち、知らずにいてほしくはありません。私はほかの異邦人たちの間で得たように、あなたがたの間でもいくらかの実を得ようと、何度もあなたがたのところに行く計画を立てましたが、今に至るまで妨げられてきました。(14)私は、ギリシア人にも未開の人にも、知識のある人にも知識のない人にも、負い目のある者です。(15)ですから私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。

一読して受けた印象では、この箇所は単なる挨拶の言葉であって、他に特別な点はないように思われる。また、文章の文字上においても、続く十六節、十七節が容易に理解し難い箇所であるのに対し、この十五節までは平易明瞭で、その意味は簡単に掴み得るのである。ならば、私たちはこの箇所を平凡で面白味のないものと見なし、特別な注意を払う必要はないのだろうか。

これを山の中の水に例えることができる。木の根を潜り、草の葉を渡って谷に集まり、いくつかの谷川が窪地に注ぎ、下から湧き出る水と合流して一つの湖を造る。その湖の深さ、静けさ、清らかさは、天に向かって開いた澄んだ瞳に例えることができる。その貴さは誰もが認めるところである。湖の水は静かに静かに下方に移動し、やがて湖口から川となって流れ出る。その川は湖に比べれば狭く浅い。ただ岩に激突しながら水が低い方へと流れていくだけである。それゆえ、浅い観察者はこの川を無視して、ただあの湖の奥深さだけを讀める。しかしながら、実はこの川にもまた少なからぬ趣と味わいがあって、あの湖において見出したものとは異なる別の貴さが

あるのだ。その水の流れ、その岩のたたずまい、その兩岸の姿、その浅い流れ、その青い深淵……そのすべてのものには独特の風情がある。ローマ書一章一節から七節を尊んで、八節から十五節を平凡として捨て去る人は、山中の流れを捨てて、その湖だけを愛する浅はかな人である。ちなみに言うのと、一度川となって湖から流れ出た水が、やがて突如として大瀑布の壮観を作り、また川となり、また湖となり、また瀑布となり、幾度も姿を変えつつ、ついに洋々たる大河となって海に注ぐように、ローマ書全体は幾度も幾度も姿を変えて読者の前に現れ、そしてそのどの姿にもそれぞれ特殊な趣きがあつて、ついに終わりに至るのである。これを読む者は、その一語一句、一節一節、一章二章、そのすべての箇所に細心の注意を払わなければならない。一つとして不用または無価値のものはないのである。

まず注意すべきは、一章八節から十五節がパウロの人格の表露であるということである。一節から八節は自己紹介ではあったが、その内容はパウロのキリスト教観の綱目のようなものであった。すなわち、パウロの神学、パウロの人生観の縮図であつた。自分の哲学や自分の所信を公表するのに非常に熱心で、決して自分自身を現わそうとしない人が世には多い。自分の感情、感激、意図、気持ちなどをそのまま公表して、ありのままの自分の姿を人の前に露呈することを努めて避けるのは、取るに足らない人の常である。然るにパウロは、自分の信念と併せて、自分そのままの姿を赤裸々に人の前に現して、少しも後悔しない人である。ここに彼の偉大さが存在するのである。また美しさも存在する。八節から十五節はすなわち、この純粋な自己発表である。

私たちがここを読んで彼の性情に触れ、彼の心の動きを見ることができるとき、一種微妙な心の糸が彼と私と

ちを繋ぐことを実感する。それだけでなく、これによって偉大なキリスト者の人格を知り得ることは、私たちにとって様々な意味で少なからぬ幸福と利益である。世界を動かした大使徒の人格はいかにあるか、最も大いなる愛をキリストに捧げた偉人の性情はいかにあるか、私をも焼き尽くさんとするような熾烈で敏感な魂の所有者の偽りのない姿はいかにあるか。これらを知ることが、信仰上の実践的な学問として、その価値は少なくない。もちろん、この箇所をもってパウロの性情の全部を知ることができない。他にコリント人への手紙第一、第二のような、この意味において極めて有力な材料を併せ見るべきは当然のことであるが、少なくともこの箇所の真価がここにあることは、まず明らかにしておくべきである。

八節の前半を原文の順序のままに記せば、

まず第一に感謝します 私の神に イエス・キリストを通して あなたがたすべてについて

となる。「第一に」と記すが、八節以後には第二も第三も出てこない。あたかも頭があつて尾がないかのようである。文法的に、また文章学的にこれを推奨することはできない。しかし、この種の文法無視はパウロにはありがちなことである。彼の書簡中には、この種の欠陥をいくつも発見することができる。主語があつて説明語である動詞がない場合なども一度や二度ではない。もちろん、この種の不注意をことさら真似すべきことではない。しかし、文法的な不注意は平然としたパウロが、大切なことにおいては、実に遺憾のない注意を用いた一事は、私たちが十分に学ぶべきことである。結局のところ、文法は形体のことであり、どちらでもよいものだ。生ける精神は生命であるから、形体がどうであれ、沸々と文字の外に溢れ出るのである。パウロが注意を用いるべきこと

と、用いる必要のないこととの差別を設けたのは、大小、緩急をそれぞれ適切に弁別し、かつ配置した実務的な手腕の一端であると思う。

「まず第一に感謝します」である。挨拶の最初が感謝である。人に対する感謝ではない、神に対する感謝である。パウロが歓喜に溢れた人であって、喜びをただ自分の喜びとせず、これを神への感謝という気持ちにおいて味わったことは注意すべきである。しかも、神を思うことが常に心の先頭を占めていたため、このような挨拶の最初に「第一に神に感謝します」という言葉が自然と出たのである。実に美しい心、慕うべき魂の清さではないか。まず感謝するのである。まず神に対して感謝するのである。しかも、自分の事業の成功のためではない、自分の名譽が上がったからではない。実に他人のことについて、しかも人々の信仰について、福音それ自身のことについての感謝である。純粹で貴い感謝、かつ常に神と共に歩んできた人の心の反映としての感謝である。

次には「イエス・キリストを通して」の一句があることに注意すべきである。これはパウロが特に好む句であって、彼の信仰の性質を示すものである。すなわち、神と自分の間の仲介者としてキリストを見るのである。これは前回に説明した点であるから、ここでは繰り返す必要はない。その次には「あなたがたすべてについて」の句がある。パウロの感謝は、自分についての感謝ではなく、ローマにいるすべての信徒、つまり信徒全体についての感謝であることが分かる。

第一に、イエス・キリストを通して私の神に、あなたがたすべてについて感謝するという。何を感謝するのか、何のための感謝か。これを示すものは、この節の後半（原文においては）である。すなわち、日本語聖書に「あ

なたがたの信仰を世こぞって言い広めたので」とあるものである。これを正確に言えば、「あなたがたの信仰が全世界に言い広められたことを」である。パウロはこのことを神に感謝したのである。全世界にローマの信徒の信仰が言い広められたと言うのは、誇大に過ぎると難じる人がいるかもしれない。もちろん、この種の用語において、人は数学的正確さを期することはできない。「全世界」というのも、当時世界に生きていたあらゆる人間を含むと見ることはできない。しかし、「世界」と「地球上」とは決して同一の範囲を指す語ではない。「世界」という語の指す範囲は常に時代によって異なる。当時の世界は、すなわちローマ世界である。ローマ帝国の政令と文化とが行き渡っていた世界である。まだドイツの大森林が中央ヨーロッパの蛮族の根拠地であった時、まだロシアの大平原が野人と野獣の住処であった時、まだ英国が北方の民族による争奪の舞台であった時、もちろん、まだ北米南米両大陸は発見されず、東洋文明は別世界のものであった時、この時にいう全世界は、地中海を中に挟む、いわゆるローマ世界であったのである。

このようなものが当時の全世界であった。そしてローマの都はその中心であった。山の頂の水が流れて麓を潤すように、池の中央に投げ込まれた石が波を岸まで漂わせるように、首都の出来事は噂の波に乗って、おのずとローマ世界全体に聞こえるのである。

「言い広められる」の原語 (*katagellēai*) は、「言伝えられる」と「称揚される」との両方の意味を持つ語である。すなわち、ローマの信徒の信仰が単に言伝えられただけでなく、称揚されたのである。もちろん、不信者はこれを称揚しなかったであろう。しかし、信者は皆これを称揚したのである。首都の信者の信仰がローマ世界の

キリスト教徒全体に聞こえて、その称揚を得、その信仰を励ましたことはもちろん、不信者の側においても、評判はかなり高くなつたと思われる。当時、キリスト教はまだ今日のように文明国の宗教としては認められていなかったとはいえ、ともかくもユダヤ人の間から出た一つの新しい宗教として、ようやく世間の注意を惹くに至つた時であつた。この時、首都ローマに若干の信徒が現れて、しかもその信仰の堅固さと操守の厳正さがあつたことは、ちようど燃える炎に新しい薪を投じたかのように、ローマ世界の不信者をして、たとえ好感をもつてせずとも、少なくとも驚異の目をもつて、この新宗教に接するようにさせたと思う。

中央の信徒の信仰的堅固さは、全世界の信徒を奨励する道となり、また全世界の不信者をして、新宗教に注意を向けさせるゆえんとなつた。この二つの事柄を含めて、パウロは感謝したのだと思う。前者はもちろん、感謝の充分な動機たり得るが、後者は果してどうかという疑問も出てこよう。しかし、パウロがただの評判を喜ぶ人ではなかつたことは言わずして明らかである。彼はこうして福音が次第に全世界に浸透すべきことを思つて、胸の躍る喜びを感じたに違いない。神の福音を全世界に広める大志望を、その燃える魂に満たしていた大使徒パウロの心を思う時、私たちは第八節の感謝の動機を知ることになくはないと思う。いずれにせよ、中央の信徒の重い責任を考え、その位置に対して適切な価値の認識と敬意とをもつてしたパウロの細心さは注意すべきことである。

九節において、パウロは彼が絶えずローマの信徒を思つてゐることの証人として神を指し示すのである。「……神は私が絶えずあなたがたを思うその証人である」と言う。原文によれば、「私の証人は神である」である。パウ

ロがローマの信徒を絶えず思っていたこと、そして何とかして彼らを訪れたいという切なる願いを抱いていたこと、そのことは彼の心の中の事実であって、彼が最もよく知っていることである。多分、彼の二、三の友人は彼のこの心を彼から聞いて知っていたであろう。しかし、誰よりも最もよくこのことを知っているのは神である。人はこれを疑うかもしれない。しかし、神はその証人である。そして世に神に勝る証人があろうか。人の中に一人の証人がなくてもよろしい。私の証人は神であると真実をもつて言い得るだけの自信があれば足りるのである。まことにパウロ式の雄々しく力強い言葉であると思う。

この神はどのような神か。彼は言う、「私がその御子（キリストを指す）の福音において魂をもつて仕えている神」と。「魂をもつて」は原文「私の霊において」（英語・in my spirit）とある。わが魂においてである。パウロは自分の心霊において神に仕えるのである。そして「その御子の福音において」神に仕えるのである。パウロが神に仕えるのには二つの特質がある。第一はその魂において、第二は神の子の福音というある限られた範囲において仕えるのである。

実にこの二つは、私たちが神に仕えるにおいて欠くべからざるものである。私たちは自分の心霊において神に仕えなければならないと共に、またキリストの福音において仕えなければならないのである。そしてこの二つの制限を超えない限りにおいて、私たちが神に仕えることは自由である。然るに、世にはこのことを知らないキリスト者が多い。「神は霊であるから、礼拝する者もまた霊と真理をもつて礼拝すべきである」とのイエスの教えを忘れたかのように、空虚な形式を山と積み重ねて、それにおいて神に仕えることを常とする者が多い。複雑な儀

式に依り、煩雑な手続きを経て初めて礼拝の道を全うすると誤解している宗派と、それに属する信徒が多いのは嘆かわしいことである。このようなことは、実に異教的形式と称すべきものである。キリスト者は、ただその心霊において、また神の子キリストの福音において、自由自在に神に向かつて生きた奉仕をすべきものである。プロテスタント教の成立は、実にこのような純粹な礼拝の要求に根ざすものである。然るに、今や末流は濁り、不純な礼拝に心身を疲れさせる者が多いのは嘆かわしいことである。私たち、努めて原始の純粹を追おうと志す者は、パウロのこの言葉において、彼が私たちの味方であることを知って喜びに堪えないのである。

次は十節である。パウロは祈るたびに、ローマ行きの願いが叶えられることを求めている

と言うのである。日本語訳聖書においては十節は九節と分離して訳してあるが、実は九節と十節を一続きとして、およそ次のように訳さなければ原意は通じないのである。

それは、私が何とかして、ついには聖なる御心によって安らかな道を得て、あなたがたのもとへ行きたいと、私が祈りのたびに願って、絶えずあなたがたを思っていることについては、その御子の福音において私の霊をもつて仕えている神が私の証人である。

右の訳で丸点を施した部分は原文での十節、他は九節の部分である。これは仮の訳であるが、しかしこれによって原文の心は知り得ると思う。すなわち、神はただパウロがローマの信徒を思っていることの証人であるだけでなく、そのローマ行きの希望を強く抱いていること、祈りの度ごとにこの希望の実現を神に求めたことの証人であると言うのである（日本語改正訳を参照のこと）。

「平坦な道を得る」については様々な解釈があるが、大体において「行くべき道が開かれて」というほどの意味である。右に掲げた訳で「何とかして遂には」と訳し、日本語訳聖書で「終には……速やかに」と訳した原語は、*ei pōs eḏe pote* (アイポース エデーポテ) である。これは他の国語に訳し難い句であるが、「もしできるならば 速やかに しかし時は不明」という意味である。まことに奇妙な言い表しと言うべきである。

マイヤーは「if perhaps at length on some occasion (もし多分、遂には、ある時に)」と訳し、ゴウデーは「if by any means now at length (もし何とかして、今、遂に)」と訳し、ビートとサンデーもほぼゴウデーと一致している。第二語のエーデーは現在または近い未来を意味する語で「今」とか「速やかに」とか訳すべき語であり、第三語のポテは「some time or other (いつかは一度)」というような時の不定を示す語である。

私たちは、この奇妙な言い表しを用いたパウロの細心さを賞賛するものである。彼のローマ行きはアイポース(もしできるならば)である。彼は行こうと志し、祈りのたびに神に祈り、神は多分この祈を聞くであろうと思う。しかし、もし神が許し給わなければ、行くことはできない。ゆえにもしできるならばなのである。次はエーデー(今、速やかに)である。今にも速やかに、遅くとも近い未来に行き得るであろうと思う。しかし、神でない身の断言はできない。神が許し給わなければ速やかに行くことはできない。ゆってポテ(いつかは一度、時は不明)なのである。ひどく曖昧のように見えるが、実はそうではない。真の信者はこう言うほかないのである。誰が明日のことを知り得ようか。誰が聖なる御心すべてを知り得ようか。事柄はどのように進みゆくか、どのように変わりゆくか、到底人には分からない。未来の自分の行動について断定的な言葉を用いない者こそ、実は強い信頼

に住む信者である。私たちは、この短い一句にパウロの信仰の性質を知り得たことを喜び、かつこれを自分の手本とすべきである。

十一節でパウロはローマ行きを強く望む理由を述べている。「私があなたがたに会いたいと切に望むのは、御霊の賜物をいくらかでも分け与えて、あなたがたを強くしたいからです」とある。御霊の賜物を与えて、彼らの信仰の成長を促し、その確立を図ることが、彼のローマ行き切望の動機であったのである。「切に願う」の原語 *epipotheo* (エピポセオー) は節に願うことを意味する。この場合、彼らに会いたいと願う感情が非常に切実であることを言い表すのである。まことに情の人パウロは、いかに強く彼らを思ったことであろう。ローマの信徒の信仰がいかに純良堅固であつても、大使徒パウロから見ても、なお成長の余地があるものであつたことは言うまでもない。彼らは文明の大都市で、幾多の有力な不信者に囲まれつつ、強烈な誘惑の風に襲われつつ、その信仰の孤城を守っている。しかも彼らを指導すべき有力な師はいない。そして責任は無限大である。私には彼らに与えるべき霊の賜物がある。彼らを訪れてこれを分かち与える時、彼らの信仰が強固になり、霊的生命が豊かに強くなるのは当然である。彼は小アジアの丘陵から、またギリシアの海辺から、西の方、夕日の沈む辺りを遙かに望み見て、彼らのもとへ行きたいという切望に心が焼かれて、何度熱い祈りを父なる神に捧げたことであろう。美しいかな、情の人パウロよ！

この十一節と比べて、十二節は特に注意すべき節である。これを原文に忠実に訳せば、「すなわち、あなたがたの中にありて、あなたがたと私の互いの信仰によつて、共に慰められんためである」となる。「すなわち」の原語

は *touto de esuin* (トウト デ エスティン) である。換言すれば、という日本語にほぼ近いのであるが、前の言葉が不適当、あるいは不十分である時に、さらに適切にまたは十分に言うという場合の発語である。この場合のように、「十二節の言葉がやや不適当であるゆえ、さらに適切な言い方をすれば」という意味になるのである。

ゴウデーは、この句を「*orto speak more properly* (あるいは、より適切に言えば)」と訳し、マイヤーは「このように言っても、次のように意味するに過ぎない」という意味であるとしている。日本語で一つの語句を記した後、さらに適切な語句を記す時に「否」の一語を挿むのが、多分この場合に該当していると思われる。すなわち、必ずしも前言を打ち消すのでなく、それをよりよく言い直そうとするのである。

パウロはなぜこのような言い直しをしたのであろうか。おそらく十一節においては、彼は彼らに対して師たる態度をとっていた。しかし、彼はこの時、彼と彼らの関係にふと思いつき、彼らが彼の純粋な弟子ではなく、むしろ大部分がまだ会ったことのない人であることを思い、ここに友人たる態度をとるのが適切であると考えたのである。ここにこのような発語を用いて、「私があなたがたのもとへ行きたいと切望するのは、実に相互の信仰によって、互いに慰められ励まされるためである」と言い直したのである。ここにパウロの謙遜と慎慮を見る。偉大なる彼にして、彼らの師たる資格がありすぎるほどある彼として、このことがあるのはまことに奥ゆかしい限りである。その美しい礼譲と繊細な心情とは、彼の人格の香りをますます芳醇ならしめるものである。自己を偉大とせず、自己を高きに置かないのが偉人の特色である。

情の濃やかな十一節と、謙遜で美しい十二節とを併せ見て、パウロの貴さは今更のように感じられる。これを、

自己を高いところに置いて異邦人信徒の兄弟たり得ない今日の欧米宣教師たちに比べて、いかに大きな相違であろうか。師であることを知って、友であることを知らないところに、真の伝道が行われるはずがない。パウロの偉大さをもってして、なお喜んでこの態度に出たことは、今日において大いに注意すべきことである。

十三節は、ローマの都での伝道の志望は今日まで盛んであったけれども、事態がそれを許さなかったこと、今もなおある事柄のために妨げられ続けていることを示す。「思い立たなかったのではない、許されなかったのだ」と言うのである。「計画がされなかったのではない、阻止されたのだ」と言うのである。

十四節は十三節の理由提示とも言うべきもので、大きな円の中に小さな円を包んだようなパウロ式の論法である。「私は、ギリシア人にも異邦人にも、また賢い人にも愚かな人にも負っている（借りがある）」と言う。「異邦人」は野蛮人という意味である。ギリシア人は文明人である。パウロは、文明人にも野蛮人にも、学者にも無学な者にも、福音宣教をなすべき責務があると言うのである。これを果たさないうちは債務を負っている。これを果たして初めて負債を償却したのである。この大きな責任を負わせられたのだから、自分は当然すべての人に伝道すべき義務があるのだ、と言うのである。まことに気宇が广大で、責任感が熾烈な、類まれなる壮大な言葉である。

文明人にも野蛮人にも、知者にも愚者にも福音宣教の義務を負うという言葉の裏には、福音が文明人にも野蛮人にも、知者にも愚者にも、すべての人に適する教えであることが暗示されている。まことにそうである。福音は世のすべての人に適する。国籍の差別、文化の相違、階級の高下、知識の有無、賢愚の差、老若男女の別は、

福音の前には皆無である。福音はすべての人々の信仰と受容に適する。だからこそ神の福音なのである。すべての人を救おうとする神の力である。パウロは、この大いなる責任感を述べた後、十五節において「ですから私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです」と記して、この熱意あふれる挨拶の部を閉じたのである。

この挨拶を全体として見ると、その中にパウロの感謝があり、心の願いがあり、祈りのテーマがあり、切なる情の発表があり、美しい謙遜と礼讓があり、高大なる責任感がある。文字は平坦であるが、その内容は百姿千態の趣があり、特に彼の情性の偽りのない発表として、その価値の大きさを思わざるを得ない。

パウロはローマの信徒に対して上記のように謙遜であった。このような態度は、彼を軽蔑の的として彼らの前に提出するようなものではないか。彼らの中には、このような言葉に接してパウロを蔑むに至った者があるいはいたかもしれない。パウロが自分に軽蔑を招く危険をまで冒して、あえて謙遜な態度をとったのは、愚の極ではないか。然り、愚の極であるかもしれない。しかし、彼がこのように自分以下の者に対して謙遜であったのは、彼の魂の清さとキリスト的精神の豊かさを示すものである。ドイツの文豪ゲーテは言った。

最も普通の宗教は、自分以上の者を崇める宗教である。これは多数者の宗教である。これより高みにある宗教は、自己と同等のものを崇める宗教であり、すなわち哲学者の宗教である（いわゆる人類的思念と称して、人が人を自己と同等のものとして崇める人生観を指す）。されど最上の宗教は、自己以下の者を崇める宗教である。これすなわちキリストの教えである。

と。ゲーテを称して真の意味のキリスト者とは言い得ないが、彼の高秀な天才は、彼をしてこの深い評語を発せしめたのである。自分より低い兄弟に対して謙遜と礼讓を守り、かつ切なる愛慕の情を披歴した使徒パウロの態度が、いかにキリストの心に似たものであるかは、説明を待たずして明らかである。